



# 学校だより

～ ひびきあう心 かがやく笑顔 ふれあいの丘 斎藤分 ～

令和6年 1月 31日 2月号

横浜市立斎藤分小学校 校長 黒木 健

## 言語理解へのヒント

校長 黒木 健

私は、書店に行くによく語学書のコーナーに足を運ぶのですが、最近、「語源で覚える〇〇語」といったような題名の書籍を目にすることが多いように思います。中でも特に需要の高い「英語」は、その続編が刊行されるものもあり、効率的に英単語を覚えたいという読者がいかに多いのかを物語っています。実際に私が、効率的に英単語を覚えたいと真に思い始めたのは高校1年生の頃でした。一つ一つの英単語を学習参考書の1頁目から順番に覚えても、実践ではあまり役には立たず、また無味乾燥な方法でただ暗唱しただけの英単語は、長期記憶としても定着しにくいことから、他に何か良い方法はないものかと考えめぐねていたという経験が今でも思い起こされます。また当時は、今ほど多種多様な学習参考書も刊行されてはおらず、自分で工夫して学習する以外に方法はありませんでした。そうした境遇が英単語の語源をヒントにしつつ、その英単語本来の意味とを関連づけて覚えるという自分なりの手立てを編み出していくことにつながっていったのだと思います。

例えば、**sympathy** という言葉があります。これは、**sym** (一つの) + **pathy** (心) と捉えると、そこから「同情」や「共感」といった訳語が生み出されることが容易に理解できます。同様に、**a** (無いこと) + **pathy** (心) で「無関心」、**anti** (反対) + **pathy** (心) で「反感」、**em** (外から中に入ってくるイメージ) + **pathy** (心) で「感情移入」など、理屈をおさえた上で英単語を覚える(英単語を理解する)ことの意義がこの一例からだけでも実感できるのではないのでしょうか。こうした内容は、先の「語源で覚える〇〇語」といった類の書籍ではもちろんのこと、今では多くの学習参考書の中でも言及されている基礎的知識ではありますが、私が高校生の頃には、こうした内容が述べられた機能性のある学習参考書は僅少でした。因みに欧米では、このように英単語の語源などを一つの手掛かりに語彙力を増やしていく手法は、**vocabulary building** (語彙力増強) と呼ばれ、英語ネイティブの世界でも重用されている効率的な言語学習方法の一つとなっています。

また、英語以外の言語でもこの学習方法は効果を発揮します。例えば、中国語では、いちご系の小粒の果物のことを「莓 **mei**」と表現しますが、そこで、「草莓 **caomei** (いちご)」「藍莓 **lanmei** (ブルーベリー)」「樹莓 **shumei** (ラズベリー)」と関連づけて覚えていくことは、同様に長期記憶としての定着や言語理解への足掛かりともなるはずです。

加えて、いま覚えようとしている英単語が、実際の英文の中でどのように使用されているのか、いくつかの例文を参考にしながら、1. その英単語の意味と、2. その英単語の具体的使用場面とを関連させて覚えていく(理解していく)ことは、言語理解を深めていくためにも必要な通過点であると考えます。私のイメージでは、それは頭の中にテーマごとに一つの座標軸を形作っていく作業のようなものと捉えています。英単語の学習に限ったことではありませんが、個々の学習内容をそれ単体で記憶または理解しようとしても、長期記憶としては定着しにくく、また全体的な理解にもつながりにくいことから、個々の学習内容を他の学習内容と関連づけ、且つ頭の中で体系化していくことはとても重要です。私がこうした学習方法の一端に気が付いたのは高校1年生の頃でしたので、少し遅くやって来た「気付き」であった感は否めませんが、どうすれば、学ぼうとしていることを体系的な理解へとつなげていくことができるのか、これからも考え続けていきたいテーマであると思っています。何かの参考になりますと誠に幸いです。